**【高松キャンパス】**

**読書感想文**

| | | |
|---|---|---|
| 優秀賞 | 制御情報工学科４年 | 福冨　晴菜 |
| 佳　作 | 機械工学科３年 | 橋本優一郎 |
| 佳　作 | 建設環境工学科２年 | 中井　都由 |
| 佳　作 | 建設環境工学科２年 | 村上　恵実 |

**千頁読破記**

| | | |
|---|---|---|
| 優秀賞 | 電気情報工学科２年 | 関屋　瑞樹 |
| 佳　作 | 電気情報工学科４年 | 鈴木　雅敏 |
| 佳　作 | １年１組 | 高崎　夏帆 |
| 佳　作 | １年４組 | 中根　　嶺 |

**夏休み体験文**

| | | |
|---|---|---|
| 優秀賞 | １年１組 | 柴谷遼太朗 |
| 佳　作 | 制御情報工学科４年 | 黒田　一弘 |
| 佳　作 | 建設環境工学科４年 | 村山　太紀 |
| 佳　作 | 建設環境工学科３年 | 藤井　裕孝 |
| 佳　作 | 建設環境工学科３年 | 増尾　　敬 |

**【詫間キャンパス】**

**読書感想文**

| | | |
|---|---|---|
| 最優秀賞 | １年７組 | 安藤　　翼 |
| 優秀賞 | 電子システム工学科３年 | 岩倉夕希子 |
| 優秀賞 | 電子システム工学科２年 | 貞廣　幸奈 |
| 佳　作 | 通信ネットワーク工学科2年 | 長尾　健太 |
| 佳　作 | 情報工学科２年 | 矢野友加里 |

# 講評

**高松キャンパス**
一般教育科　**坂本 具償**

高松キャンパス国語科では、4年生以下には夏休みの課題として作文を課しています。また5年生・専攻科生には、自由応募という形で出品してもらっています。今回は、読書感想文が132篇、千頁読破記が200篇、夏休み体験文が246篇で、合計578篇でした。ただし5年生以上は1篇しかなかったのが少し残念です。

では、この図書館だよりに掲載された入賞作品に対して寸評していきましょう。

読書感想文優秀賞福冨さんの「家のない少年たち」（鈴木大介著）について。この本には、親にも地域にも見放された少年たちが、犯罪を犯しながら自分たちの居場所を探し続ける姿が描かれています。福冨さんは冒頭で、犯罪を犯す少年たちを一方的に悪として責めてはいないだろうかと問いかける。犯罪を犯す少年たちは、「社会が生み出した被害者」であり、「生まれながらの被害者を転じての加害者」なのだと言う。もちろん犯罪は肯定するものではない。しかし「頼れる大人は一人もいない」、親からの「無条件の愛情と教育を知らずに育った」少年たちを倫理的にただ批判していいのかと鋭く問題提起しています。社会の闇の中で、生き抜くためにする犯罪。それは許されるのか。重たく難しい課題です。

千頁読破記優秀賞の関屋君は、千頁は絶対に無理だと思っていたが、デール・カーネギーの『道は開ける』『人を動かす』『名言集』の三冊は、おもしろくてのめり込んでしまい、その壁を簡単に乗り越えることができたということです。評者が思うには、一つは選んだ本が良かったということ。二つ目に関屋君が虚心に無心に本の世界に向き合えたということが良かったのではないかと。読書は、決して「語彙力を高めるだけのもの」でなく、「人の心まで動かせるもの」だと気づいたことは、今後の関屋君にとって大きな財産です。

佳作の鈴木君は、伊坂幸太郎氏の「表現力」に着目しています。伊坂氏の小説には「一際光る文章がちりばめられていて読む人の心に響くという。今後、社会の中でますます必要とされるコミュニケーション力。そのために相手の心をしっかりとつかむような一文が書きたい。鈴木君の思いが伝わってきます。

同じく佳作の高崎さん。高崎さんは二つの発見をしています。一つは以前読んだときには気づかなかった物語の意味が、今回再読してみて、それが見えたこと。何回も読める。読む度に新鮮な気づきがある。これが読書の楽しさですね。もう一つは、本を読み進める中で常に「自分を持つ」ことが大切だと気づいたこと。この経験を生かして今後さらに、より深い読書の世界で遊んでほしいと思います。

夏休み体験文優秀賞柴谷君の「明日を目指して」。これについては選者の担当主事から凡そ以下に示すコメントを頂いています。

ある一つの出来事に対してではなく、中学から高専に入学して現在までに至るまでの自分の生活について書かれている点が他の作品とは大きく異なっていたこと。具体的には勉強と野球という文武両道への取り組みに対する自分の姿勢や気持ち面での葛藤、そこから得たものと、今後の意気込みが明瞭な文章で書かれていること。1年生ながらこれだけ自分の姿勢を文章で示すことができること。

以上のことが高く評価されたようです。柴谷君の思いが変化球ではなく、ストレート勝負で伝わってくる文章だと評者も思います。頑張って下さい。

**詫間キャンパス**
一般教育科　**東城 敏毅**

自分にとって「非日常的なこと」「全く関係ないこと」と捉えていた事柄が、突然自分の身にふりかかると、人は驚愕し、深く心に刻まれる。その非日常的なこととは、現代日本では、例えば「戦争」であり、「死」であろうか。しかし、それらを自分の体験として捉え返してみると、新たな

自分の存在に気が付くはずだ。読書はまさにそのような体験である。

平成24年度の読書感想文コンクールは、333編の応募を得た。その中から最優秀賞に安藤翼「『あの戦争のなかにぼくもいた』を読んで」、優秀賞に岩倉夕希子「わたしのたーちゃん」と貞廣幸余「電池が切れるまで」、佳作に長尾健太「『なぜ生きる』を読んで」と矢野友加里「『くちびるに歌を』を読んで」が選ばれた。

最優秀賞の「『あの戦争のなかにぼくもいた』を読んで」は、終戦四年前から終戦後二ヶ月の間に揺れ動くキリスト教を信仰する父とヨシ君の心情、ならびに当時の時代背景から「あの時代に僕も生まれていたなら……」と問いかけ、また筆者の沖縄旅行の体験も照らしながら表現した力作であり、多くの審査員から好評を得た。優秀賞「わたしのたーちゃん」は、最近問題になっている「児童虐待問題」を中心に、自分の母への思い、将来母になるであろう自分の中に潜む母性を表現している。冒頭、筆者の夢の中にあらわれる「たーちゃん」の描写は秀逸である。「電池が切れるまで」は、やはり最近問題になっている「いじめ問題」を中心に、小児病棟で病魔と闘っている多くの子どもたちの思い、そして「命がある限り精いっぱい生きる」意味を、子どもの詩などを引用し表現豊かに描写している。佳作「『なぜ生きる』を読んで」も筆者の友人の死という大きな悲しい出来事をきっかけに「命とは?」「生きるとは?」を深く追求したものである。「『くちびるに歌を』を読んで」は、筆者の部活での出来事を中心に、周りの人との出会いと仲間の大切さを再確認し、そして未来の自分へ向けた「手紙」でもある。

どの作品も筆者の体験とその体験が自分にもたらした心の変革を忠実に再現して表現している。冒頭にも述べたが、「非日常的なこと」を自分の体験として捉え返し、新たな自分を見い出す。その新たな自分を忠実に、また迫力ある文章で書きつづった作品が、審査員の好評を得たといえるであろう。来年度以降もぜひ多くの本に出会い、新たな自分に出会い、そしてその体験を感想文として提出していただければ、と願っている。

最後に、今年度も苦言を一言付記しておく。それは、今回も、やはりインターネットからそのまま転載したものが数例見受けられたことだ。これは「盗作」であり、法に触れることである。このような行為は自分自身の首を絞めること、さらには新たな自分を見出すせっかくのチャンスを逃していることにもなる。ともかく技術者を目指す学生諸君が絶対にしてはいけない行為なのだ。こう肝に銘じておいてほしい。

# 入賞作品紹介

## 〈高松キャンパス　読書感想文〉

**優秀賞**

### 家のない少年たち

制御情報工学科４年　福冨 晴菜

少年犯罪と聞いて、まず何を思い浮かべるのだろうか。犯罪の低年齢化や少年犯罪の凶悪化等がマスコミでは報じられている。ただ悲観し、一方的に彼らを悪とし、責めてはいないだろうか。

親からの虐待、過度の育児放棄、そして貧困から帰る家を失い、路頭に迷った少年たちは犯罪を仕事として生きていた。私たちと同じように、喜び、悲しみ、憎み、時には涙し、精一杯生きていた。

劣悪な家庭環境から逃れた彼らは、大きな傷を抱えたまま生活していた。子どもたちが与えられるべきである、親からの無条件の愛情と教育を知らずに育った彼らが選んだ道は非常に過酷なものであった。頼れる大人は一人もいない。まさに孤独の中で選んだ道は、傷害、窃盗、詐欺といった犯罪に手を染めることだった。

この本には龍真という少年を取り囲む環境が描かれていた。

龍真には、家という記憶がほとんどなかった。父親の記憶もひとつもない。十八歳で龍真を生んだ母親は固定の住所を持っていなかった。二歳下には、父親の異なる妹がいた。二人とも虐待を受けていた。妹が小学校に入学するとほぼ同時に児童養護施設に入れられた。施設での生活も非道なものであった。問答無用の弱肉強食で、日常的に暴行が行われていた。そのため、先輩には逆らえず万引き、引ったくりを強制させられていた。

十六歳で少年院に入り、そこで三人の兄弟に出会った。身長185cmを超えるゴリラのようなマー君こと万田勝。同じくらい長身ガリガリのラリ男のサイケこと斉藤健吾。和彫りのギャル男のスギこと杉田啓介。彼らはろくな親も身元引受人もいない身の上だった。

彼らは退院後、不良を相手とした強盗を幾度となく繰り返した。しかし、この生活も長くは続かなかった。マー君はカタギに、スギとサイケは刑務所に入ることになった。

これらはほんの一部にすぎない。

彼らは反社会的であり、犯罪には必ず被害者が存在する。犯罪は肯定するものではない。しかし、彼らをただの犯罪者だと思ってほしくはない。

世の中は不公平に満ちている。残酷で残虐で弱肉強食の世界のピラミッドは底が知れない。

加害者である犯罪少年たちは、生まれながらの被害者を転じての加害者であった。もちろん、加害者である彼らの裏には被害者が存在する。

しかし、それを倫理的にただ批判していいのだろうか。

少年院出身者はこうあるべきだ。鑑別出身者はこうある

べきだ。児童施設出身者はこうあるべきだ。このような指し示された道に従って生きれば、彼らは幸せになれるのだろうか。答えは否だ。現実は疎外が疎外を生む。前科のある者や、履歴書に経歴を書く事のできない少年は、再び被害者となる。指し示された未来が搾取の連続でしかなく、希望を持てなかったから、彼らは兄弟となった。

彼らは、間違いなく社会の闇だ。この社会が生み出した被害者である。被害者でありながら同時に加害者でもある。そんな彼らは誰よりも強く、そして、弱かった。社会のゴミと罵られ、救いの手を差し伸べられなかった少年たち。彼らから可能性を奪ったのは誰か。彼らを突き放したのは誰か。なんと悲しいことだろうか。世界は綺麗ではなかった。けれど、悲観し嘆くほど酷いものでもなかった。彼らは逞しかった。誰よりも逞しかった。

「俺たちは生き抜いてやる。」

サイケの言葉である。そう、私たちは生きぬくのだ。この汚くも捨てたものではない世界で生きていく。

『家のない少年たち』　鈴木大介　太田出版

## 〈高松キャンパス　千頁読破記〉

**優秀賞**

### 「本を読む」ということ

電気情報工学科２年　**関屋 瑞樹**

事実、僕は本を読むのはかなり苦手である。いざ読もうと思って買っても途中であきらめてしまうことが多々あった。僕は中学校の時以来、本を1冊も読んだことがなかった。そのせいか、自然に語彙力も衰え、テストはおろか、人との会話でさえうまくできなくなってしまった。（本だけのせいにはしたくないが）。これはまずいと思って、やってみようと思ったのがこの「1000ページ読破記」である。最初は1000ページなんて絶対に無理だと思っていた。1000という数字がとてつもなく分厚い壁にも見えた。そんな不安だった僕の目に飛び込んできたのが、本屋で見つけた、デール・カーネギーの有名な「道は開ける」、「人を動かす」、「名言集」の文庫版3冊セットが入っている金色の箱の背表紙だった。本当に有名であるということを知ったのはその箱を手に取ってからのことで、帯を見たら世界で900万部のベストセラーということだから驚いた。文庫本だから値段もお手頃ということで早速母に買ってもらった。読んでみるとすぐにのめりこんでしまった。これがとてもおもしろいのである。読み進めるにつれて、僕の目の前にあったあの分厚い壁はことごとく崩れていった。

これらには人との関わり方や人生の中で重要なことがたくさん書かれてあった。僕がこの3冊のなかで特に気に入ったのは、「名言集」の中にある、カーネギーの「相手を腹の底から笑わせることができれば、友人になる道が開ける。相手が一緒になって笑うのは、いくらかでもこちらが好きな証拠だ。」という言葉である。この言葉を見たとき、僕は最初は「なるほど」とくらいしか思わなかったが、後々考えてみると、これは友人を作るにあたって基本的なことではないかと感じた。確かに今までもそうだった。一緒に笑うことで友人も少しずつ増やすことができたのである。これからも自然に笑顔を作ってみようという思いでさえ芽生えた。これはこれらの本の中のほんの一部でしかないが、まだまだたくさんの言葉や文があるので、また読み返してみることにする。

このように無事にすべて読み終えた僕は、本を読むことの大切さを改めて知ることができた。そして本は語彙力を高めるだけのものでは決してなく、人の心まで動かせるものでもあると思った。これからも、自分が気になる本、紹介された本は積極的に読もうと思う。

『人を動かす』　デール・カーネギー　創元社　340P
『道は開ける』　デール・カーネギー　創元社　439P
『名言集』　デール・カーネギー　創元社　251P

**佳　作**

### 表現力

電気情報工学科４年　**鈴木 雅敏**

「2階から春が落ちてきた。」

なんと詩的な表現だろう。この文を初めて読んだ時に抱いた感想である。しかしこの文章にそんな詩的な意味は込められておらず、そのままの意味であり、体育館の「2階」から主人公の弟である「春」が落ちてきた、という情景描写に過ぎない。

紹介した文は「重力ピエロ」の冒頭の一文である。私は、この本の著者である伊坂幸太郎氏の大ファンであり、彼の著書には一通り目を通している。その中で最も気に入っている作品が、「重力ピエロ」である。

伊坂氏の魅力の1つに、表現のうまさというものがあげられる。冒頭の文章もさることながら、彼の小説には、一際光る文章がちりばめられている。それは情景描写だけでなく、登場人物のセリフにも心に響くものがある。

「あのね、俺たちがその気になればね、砂漠に雪を降らすことだって余裕でできるんですよ。」

こちらは同著者の「砂漠」という作品に出てくるセリフである。常識的に考えれば、砂漠に雪を降らすことは不可能だろう。しかし、「自分たちはなんだってできるんだ。」という表現よりも、「砂漠に雪を降らすことだってできる。」という表現のほうが、強く印象に残るだろうし、なにより面白い。こういったストーリーに直接影響しないような一文でも伊坂氏は楽しませてくれる。

伊坂氏の著書を多く読むうちに、私は一文の重要性というものを考えるようになった。同じ内容の文章であっても、その表現により印象が大きく違う。ただ面白おかしく書けばいいというものでもないが、1つ心に残る物があれば、そ

の文章の評価は大きく変わってくるだろう。

将来作家になるつもりがない私にも、このことは大きく関わってくる。これから先の人生で、履歴書や挨拶文など、文章を書く機会はこれまで以上に多くなってくるだろう。商談や重要なプレゼンテーションなどを任されることがあるかもしれない。そういった場合こそ、相手の心をつかむような一文が必要なのである。

その点では、小説というものは文章のお手本であり、教科書でもある。本を読むということは、公式の暗記であり、文を書くのは演習問題をこなすのと同じなのである。

『重力ピエロ』　伊坂幸太郎　新潮社　337P
『マリアビートル』　伊坂幸太郎　角川書店　465P
『グラスホッパー』　伊坂幸太郎　角川書店　345P

**佳　作**

## 千ページ読破記

1年1組　**高崎 夏帆**

物語にジャンルを絞って読みました。この中には昔読んだことがある本も何冊かまじっていますが（これはカウントしてもOKなのか分かりませんが）、授業の読書タイムで再会し、もう一度しっかり読んでみたい、と思ったからです。村上春樹さんの「はじめての文学」もその中の1つです。授業で「鏡」のプリントを配られたとき、「読んだことあるな」と思いました。ですが、なぜこの物語を授業で扱うのか、先生がなぜこの物語をみんなに読ませたがっているのか、分かりませんでした。それを理解するために文章のすみずみまで目を通し、考えながら物語を読み進めました。すると、以前読んだ時には気づかなかった、物語の意味、すなわち、村上さんが「鏡」で表したかったことが次々と見えてくるようでした。

こうした発見が、読書を楽しいものにするのだと思います。

この夏休み、私は新しい発見を求めてたくさんの本を読みました。ここに挙げた14冊の他にも苦手な説明文や詩集も読みました。合計すると40冊を超えています。読書の楽しさを知ると、ページ数なんて気にせずに1000どころか10000ページも読めるのです。

しかし、私の文章を読む力はまだまだ低いです。活字に込められた作者の想いに私は気付けず、作者の心をぽろぽろと取りこぼしてしまっています。私は、ざるのように穴のあいた文章力でなく、しっかりとした器のような文章力を身につけ、作者の想いを全て正確に読み取れるようになりたいです。そして、作者の声に対しての自分の意見を持ち、活字を通しての会話が成り立つようになりたいです。

そのためにも、本を読み進める中で常に「自分を持つ」ことが大切なんじゃないかなと思いました。機械的に読むのではなく、自分を持つことによって、「自分ならこうするのにな。なぜ作者はこうやって表したんだろう?」となり、文章をより深く読め、作者の心にだんだんと近づけるのではないか、と思います。

『太陽の子』　灰谷健次郎　理論社　336P
『アマルフィ』　真保裕一　扶桑社　371P
『星の王子さま』　サン＝テグジュペリ　岩波書店　142P
『はじめての文学』　村川春樹　文藝春秋　268P
『銀のほのおの国』　神沢利子　福音館書店　362P
『兎の眼』　灰谷健次郎　角川書店　339P
『ジェネラル・ルージュの凱旋上』　海堂尊　宝島社　251P
『　　同上　　下』　海堂尊　宝島社　255P
『ヴェネツィアの宿』　須賀敦子　文藝春秋　285P
『神の守り人』　上橋菜穂子　偕成社　288P
『機関車先生』　伊集院静　講談社　243P
『トキオ』　東野圭吾　講談社　414P
『最愛』　真保裕一　新潮社　307P
『夜市』　恒川光太郎　角川書店　179P

## 〈高松キャンパス　夏休み体験文〉

**優秀賞**

## 明日を目指して

1年1組　**柴谷 遼太朗**

今までずっと野球をしてきた。小学校では円座サンダース、中学では、部活と硬式クラブチームで夏の炎天下の中や冬の雪の降る中も休まずプレーしてきた。今、こうして考えてみると野球を通して、自分自身は成長してきたのだと思った。

小学校の時、近所の友達と野球で遊んだのがきっかけで野球に興味を持ち、円座サンダースに入団した。野球に熱意はあるものの、人の指示を聞いていないことや周りを見ていないことなどでよく怒られた。小学校では、野球のこと以前に日常的なことや集団行動での鉄則などを学ぶことが多かった。

そして時は流れ、中学校に入学した。中学では、野球部の部活と硬式クラブチームを兼用していた。

クラブチームの練習は、ほんとうに厳しくて、丸亀にあるグラウンドまで親に送ってもらっている時もゆううつでしかたなかった。そんな厳しい練習に僕はたえかねて、母に「クラブチームをやめたい！」と言ったことがある。その時、母は、「やめてもいいよ。そのかわり後悔はないんだね?」と一言だけ言った。その言葉を聞き、やめるということは自分に負けることだ。こんなことで負けていいのか?車で送りむかえをしてくれる母にもうしわけないんじゃないのか?僕は泣きながら「やっぱ行く。」とだけ言った。僕はそのクラブチームの中でヘタクソだったけど、監督やコーチの指導のおかげで精神的にも技術的にも最初とは比べものにならないくらい成長した。そして努力の大切さや周りを見て気を配ることなどを学んだ。そのおかげで勉強にもはげむようになり、最初は、公立高校に行けるだけの学力はなかっ

たが、今ではこうして香川高専に通うだけの学力になった。クラブチームに通っている時は、自分達に厳しくする監督やコーチを憎み、嫌っていたが、いざ、クラブチームが終わってみるとあんなに自分を厳しくしかってくれたり注意してくれたりする人は親を除いてなかなかいないし、自分達に厳しく接する理由は自分達のことを真剣に考えてくれているからだと気づいた。今では、監督やコーチに本当に心から感謝している。感謝する心も自分が成長した証だと思う。

こうして中学生活を終えて、高専の受験に無事受かり、晴れて、香川高専高松に入学することになった。入学して感じたことは中学の成績はみんな自分よりも良いということ、中学では、成績は上の方だった自分は井の中の蛙だったことを思い知らされショックを受けて、不安を覚えた。「本気で勉強しなければ置いていかれる。」と思った僕は、授業の予習復習を家に帰った後必ずした。テスト期間の勉強は、気がついたら朝日が昇っていることも少なくなかった。それだけ僕は必死に勉強した。その甲斐もあり前期中間テストでは、クラスで上位の成績を修めることができた。中学の成績からは考えられないほど良い成績だったので、親や祖父母も喜んでくれた。これだけ頑張れたのは、今まで厳しい練習に耐えてきた野球人生のおかげだと思う。次の前期期末テストでは中間テストの成績を上回るように頑張りたい。

入学して野球部に入部したのだが、高校の野球部もとてもえらくて厳しいものだった。最初は、勉強と野球の両立はできるわけないと思っていたが、野球部のある先輩は学科でも常に上位に入っていると聞き、始めから両立ができないと決めつけている自分が恥ずかしく、腹が立った。野球と勉強を両立している前例があるのだから自分もできないはずはないと思ったのも勉強にはげんだ要因である。

野球の面では、高松大会では同点タイムリーヒットや良い守備ができたりしたりした。これも今までの野球生活や学校生活が積み重なって結果として現れたのだと思う。まだまだ未熟で、改善するべきところは多いが、それらは監督さんやコーチさんの指導を受けてこれからももっと上手くなりたい。

今までの僕の人生は「山あり谷あり」であり、時には上り坂、時には下り坂を走り障害物を越え、雨にも風にも負けず、過去の自分を追い越してここまでたどり着いた。これから幾多の試練にぶつかり、つらく、苦しいこともあると思うが乗り越えていきたい。

明日を目指して。

## 〈詫間キャンパス　読書感想文〉

**最優秀賞**

### 『あの戦争のなかにぼくもいた』を読んで

1年7組　安藤　翼

毎年、八月十五日の終戦記念日の頃にはTVで特別番組が放送されている。テーマはいろいろだが当時の生活を再現して、人々の苦悩の日々がとてもリアルに表現されていて、胸を打つ。TVを見ながらふとつぶやいた。

「ぼくも六十七年前に十五歳だったら、少年飛行兵だ」

そう……ぼくもあの時代に生まれていたら戦争に行かなくてはいけない。重い気持ちが心にずっと残ったままになっていた。そんな時に、この本に目がとまった。『あの戦争のなかにぼくもいた』という題名を見て、引き込まれるような感じがして、ぼくはこの本を読み始めた。

この本には、ちょうど七十年前の日本の姿が書かれていた。終戦前の苦しくて貧しい、そして宗教が厳しく制限された様子がよくわかる。主人公のヨシ君は国民学校の初等科一年生だから、父親の信仰するキリスト教を言語を覚えるように普通に受け入れ、良くも悪くも自分では判断できないままに時代に翻弄されていった。あの時代に父親を否定することはできず、まわりから「国賊」とか「非国民」と言われても納得できず、差別に苦しんでいるのが読み取れた。キリスト教は敵国の信じる宗教であったし、当時の政府や警察に受け入れられないのは仕方のないことであろう。敵国のスパイだと疑われることは違う気がするけれど、それは現代を生きるぼくだから持てる考えなのかもしれない。

読み進めるうちに、心に引っかかった言葉がある。「特高」＝「特別高等警察」だ。第二次世界大戦前にできた秘密警察で、被疑者の自白を引き出すために過酷な尋問や拷問を行った記録が数多く残されている。ヨシ君も「身震いがする言葉だ」と言っていた。だから、特高に連れて行かれ、まともに帰って来られないことがわかっている家族は、どんな気持ちで日々を過ごしたのだろうかと思った。不当なことだとわかっていても、警察がこれではどうしようもない。この時代に自由とか人権などという言葉は存在しないのだ。

そして、ますますぼくを重い気持ちにさせた言葉。「神風特攻隊」。言葉自体は知っていたが、詳しくは知らなかった。当時は特攻隊員に選ばれることは名誉であったし、少年達のあこがれであったと書かれている。しかし神風特攻隊について調べてみると、志願という名目であったが、事実上は強要であった。外国語でもそのまま通用する「神風」や「特攻」という言葉は、戦死を前提とした体当たりや自爆行為という意味で捉えられている。年齢は一七歳から二五歳までがほとんどだ。特別任務なので、家族と連絡も取れないままに太平洋に散っていったということだ。この神風特攻隊については、知れば知るほど残酷で、虚しさだけが心に残る。

この本は終戦四年前から終戦後二カ月間のことが書かれているが、激動の時代だったと言える。そしてこの厳しい時代を、日本中の全ての人々は耐えぬいた。「終戦を迎えたときに、これで生きられると思った」と曽祖母が言っていたのを思い出した。みんな死と隣り合わせで生きていたことがわかる。

ぼくは、毎年春休みに沖縄に行っている。毎回、ひめゆりの塔と平和記念公園に行く。自分的には毎回行かなくてもいいのだが、連れて行かれる。そこには、戦死された人々の写真や遺品がたくさん展示されている。写真を見る

と、みんなとても若い。ぼくと同じくらいの人もたくさんいる。直筆の手紙には、家族を想い心配する言葉や感謝の言葉がつづられている。遺品は昔のものなので粗末な感じがする。しかし想い入れのあるものなのだろう。きれいに残っているので、大切に保管されていたことがよくわかる。学徒隊で生き残った人のVTRも何度も見た。記念碑には数えきれないほどの戦没者の名前が刻まれている。辺りを走り回って見学していた自分がとても恥ずかしく情けなく思えてきた。

ぼくは戦争を知らない。父や母も、祖父や祖母でさえ十分には知らない。ぼくの感覚で言うと、戦争と言う言葉は社会科の時間にだけ出てくる言葉だ。平和な現代において、自由はすごく当たり前のことになっている。自由すぎて、最近ではモンスターと呼ばれる自分勝手な人たちが出現し、社会秩序を乱していると思う。

あの戦争の中に……もし、ぼくがいたら？　ぼくはどうしただろう？　何もかも我慢して、不当な差別に耐え、家族を守る勇気が出ただろうか？　もし、ぼくに召集令状が届いたら？　ぼくは死ぬことを覚悟できたのだろうか？　たくさんの疑問が頭の中を駆け巡り、ぼくは頭がクラクラしてきた。現実味がなさすぎて何も考えられない。でもただ一つ、言いたいことが浮かんできた。日本を支えてくれたあの写真の人たち、また全国の戦没者の人たちに心から……「ありがとうございました」と言いたい。

『あの戦争のなかにぼくもいた』　石浜みかる　国土社

**優秀賞**

## 私のたーちゃん

電子システム工学科３年　岩倉 夕希子

夏休みのある日、私は不思議な夢を見た。「たーちゃん」という赤ちゃんを抱っこしていた。白くて丸くて、とてもふわふわとやわらかくて、重力を感じない宇宙空間にいるような、だけど確かに私の腕の中にいて、まさに天使のような屈託のない笑顔を見せてくれていた。私とたーちゃんの間には何の駆け引きもなく、ただその微笑に対して限りなく無限で無償の愛を注ぎ続けることができるのは、他の誰でもなく母親の私であると、夢の中であるにもかかわらず、どれほど強く感じたろうか。実際は、私はまだ学生であり当然子供を産んだこともないし、生まれたての赤ちゃんを抱っこしたこともないのだけれど、十分そう実感できた気がした。私が感じた気持ちと同じ、いやそれ以上にもっと溢れる思いを美津子は哲也に感じていたに違いないのだ。

哲也。

なぜ、わたしから生まれてこなかった。なぜ、わたしの中に宿らなかった。

美津子の思いがこの詩にすべて凝縮されていて、胸が締め付けられる。

旧家の本家に嫁いだ美津子にはなかなか子供ができなかった。多大な時間と高額な費用を費やしたにもかかわらず効果はなかった。親戚からは、まだかまだかと責め立てられ、肩身の狭い思いを募らせていた。そんな時親戚の子供を養子にもらってくれとつめよられ、

「妊娠したんです、わたし」

と、嘘をついてしまったところから、この物語は周囲の人を巻き込みながら展開していくことになる。

一昔前では、子供の受け渡しが普通の生活の中にあったらしい。私の祖父の妹には子供がおらず、祖母には三人の子供が授り、赤ちゃんの頃に数ヶ月ほど面倒を見たことがあった。そこでその女の子を養子に欲しいと申し出たが、祖母が了承せず貰われることはなかった。その女の子が母である。もしこの申し出を受けていたら、私の祖父は今と違う人だった訳で、子供の数がやたらと多かった昔では、子供を「あげる」「貰う」は当たり前に行われていた。でも、決して一つの命を軽視しているのではなく、どの人も優しいお母ちゃんであったと思うのは私の希望的観測であろうか。

ところが昨今、大切なはずの我が子をトイレで産み落としたり、虐待して死なせてしまったりという悲しいニュースが毎日のように報道されている。子どもが欲しくて欲しくてたまらないのにできない人と、心の準備もないままに妊娠を知らされて戸惑う人。世の中は誰もが思うままにはならないもので、その仲介役ともいうべき国の機関や団体がたくさんある。熊本にある「赤ちゃんポスト」はできた当時は大変なニュースとなり、倫理観の観点から議論がなされた。子供だった私にも、そこまで日本の倫理観が失われたかと思うよりも、それを始めた一病院のアクションにすごく感銘のような感情を抱いていたのを覚えている。

「母さん」

毎日何回も口にするこの言葉。改めて母について考えることは滅多にない。確か小学生の時に、「自分が生まれた時の様子を聞いてきなさい」という宿題が出たことがあった。陣痛が強くあっという間に産まれたとか、生後一週間目に兄に顔面をふんずけられて私と母が大泣きしたとか、それなりのエピソードがあって、頭を撫でられお尻をひっぱたかれながら、「ああ、私は大切に守られてきたんだなあ」と感慨深かった。

けれども、なかなかそれが普段の生活の中で感謝に結びつくものではない。ご飯が遅くなると文句を言うし、うるさく注意されると、返事もそこそこに強く戸を閉めて抵抗したりもした。分かっていても腹が立つのだからしょうがない。どこにでもある何気ない光景だろう。だから世間では、「母の日」なる日を作り、普段の悪態を詫びるためにプレゼントを渡して誤魔化そうとしているんだろうか。自分を育ててくれた人を大切にするなんてことは、人から教わったり強制されたり、誰かに言われてすることではないと思う。そして、誰かに言われて親孝行したとしても、それは本当の親孝行とは言えないし、本当の愛情ではない。親孝行をしているという自分に酔って自己満足をしているに過ぎないのではないだろうか。

いろいろ考えると、母と子は、もっとも強い血縁関係で

あり、「母親が子供を守るために自分の命を投げ出した」という話は数え切れないほどある。これも母性による本能的な行動で、あれこれ考えた損得感情ではない。そして人は、自分が優しくされたらその人にも優しくしてあげたいと思い、そこに血縁関係があればなおのことである。だから、愛され大事に育てられた子供は、その親を大事に思う気持ちを持てるようになるのは必然的であり、自分から親孝行をできるはずなのだ。

と、偉そうな文章を並べ立て語った私はまだ母に何も返していない。「孝行したい時に親はなし」というけれど、そんなことがないように気がついた時に一つずつ返していけたらいいと思っている。「親への気持ちと愛情」を少しでも返していけた時に、初めて自分も愛情と母性に溢れた「母親」という存在になれるのではないだろうか。将来産まれ来る私の「たーちゃん」に会える日をとても楽しみにしている。

「こんにちは、私のたーちゃん」

『子盗り』　海月ルイ　文藝春秋

優秀賞

## 電池が切れるまで

電子システム工学科２年　**貞廣 幸余**

長野県立こども病院には、今もなお、長期入院している子どもたちが学ぶための院内学級がある。ここでは、小さな身体で精一杯、病気と闘いながらも、仲間と楽しく学ぶ子どもたちがいる。

難病の子どもたちは、小さい頃から何回も手術を受けている。毎日毎日苦い薬を飲まなくてはならないし、注射もしなければならない。子どもたちはなぜそんなにも苦しい日々を乗り越えることができるのだろうか。

この病院に入院している子どもたちの中で一人、「命」という題名で詩を書いた小学四年生の子どもがいた。

「命」　宮越由貴奈
命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたってやっと
神様から与えられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも
「命なんかいらない。」
と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命がつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから　私は命が疲れたと言うまで
せいいっぱい生きよう

この詩を書いた宮越さんは、小児がんで、入退院を繰り返していたのだが、この詩を書いた数ヶ月後に亡くなったという。

私はこの少女が死の直前までも「せいいっぱい生きよう」と思えたのは、やはり「仲間」という存在があったからなのだろうと思う。

最近は「学校でのいじめ」というのがニュースなどで多く取り挙げられるようになり、健常者である私たちも、「命の大切さ」ということをよく考えさせられるようになった。世の中には、「自分なんて存在する意味はないんだ」、「生きていても何も楽しいことはない」と自ら命を絶つ人がいるが、難病の子どもたちから見ると、この少女のように「命はまだつかえるのに……」と私たちに対して感じている子どもがたくさんいる。私もこれまで生きてきた中で、人間関係で辛い思いをしたことが何度もあった。しかしそのような辛い思いをしたときでも乗り越えることができたのは、周りの先生や家族の支えがあったからである。人間は誰しも一人では生きていけないし、「もう誰も助けてくれないから死のう」というのはどうだろうかと思う。どんなに一人でなやみ、苦しんでいるときでも自分が生きられているのは、「周りの人間に自分は生かされているから」＝「どこかでは誰かが自分を支えてくれているから」ではないだろうか。難病で苦しむ子どもたちというのは、常に死と隣り合わせであるため、毎日治療してくれる先生や近くで支えてくれる家族、仲間に対する「感謝の気持ち」や「他人を思いやる気持ち」が私たちに比べて強いのだと思う。だから、「命があることの幸せ」を子供たちはよく分かっているのだ。

私たちは、「命があること」、「毎日仕事をしたり、学校に行ったりできること」は「幸せ」ではなく「当たり前」のことだと思っていないだろうか。「当たり前」ではなく「幸せ」なことだと思い、普通の毎日を送れることに「感謝」することを忘れなければ、私たちもどんなに辛いときでも、「せいいっぱい生きよう」と思うことができるはずである。

「子どもたちはなぜそんなにも苦しい日々を乗り越えられるのだろうか?」、その答えは、子どもたちが、周りの支えてくれる人たちに対する感謝の気持ちから成る「命がある限り精いっぱい生きよう」と強く思う心にあるのだろう。

『電池が切れるまで―子ども病院からのメッセージ』
すずらんの会編　角川書店